

高須別院 二恩寺

主な法要・行事

修正会	1月1日	
春の法要	4月初旬	永代経・毛仏法要・花まつり
夏の法要	6月下旬	夏御文・納骨法要・暁天講座 焚焼法要・コンサート
秋の法要	9月下旬	永代経・報徳会
報恩講	12月16日～19日	

毎朝7時よりおあさじ

毎月27日午後 ご命日お逮夜勤めと同朋会（土日の場合は変更）

別院報「高須のごぼさん」年4回発行



スロープ

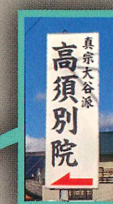


トイレ

スロープを使って車椅子のまま本堂内に入れます
本堂縁側にトイレを設置しています



高須別院
二恩寺



この看板を西に入る

納骨を随時受け付けています

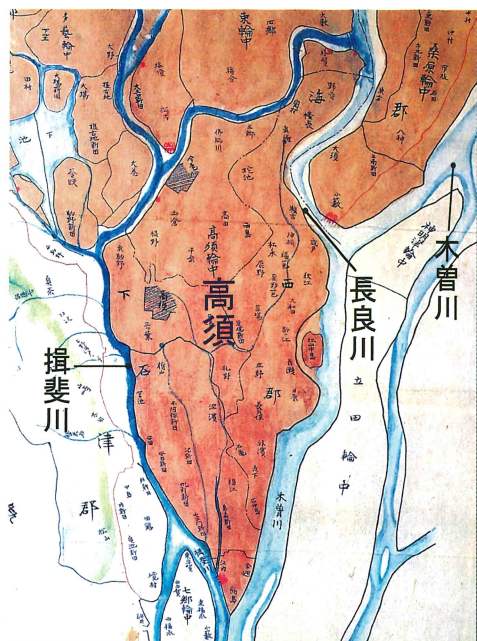
お問い合わせは別院事務所まで（平日9時～16時）

真宗大谷派 高須別院 二恩寺

〒503-0653 岐阜県海津市海津町高須町932 TEL & FAX 0584-53-0274



1 明治以前の木曾三川と高須輪中（海津市歴史民俗資料館提供）



輪中地帯

高須別院の物語

高須別院は古くから「高須の御坊さん」として親しまれてきました。このあたりは、長良川と揖斐川に囲まれた高須輪中（海拔0〜3メートル前後）と呼ばれています①。輪中地帯は低湿で水はけが悪く、住民は古くから水害に苦しんできました。

この地域にはたいへん多くの寺があります（海津市内約百十ヶ寺、うち大谷派八十ヶ寺）。厳しい自然環境の中で生きる人々にとって、寺は信仰の場であると同時に、人びとが結束し助け合うための拠点だったのです。

御坊の境内は高さ約一・五メートルの石垣②の上に広がり、さらに石垣を組んで本堂が建っています。御坊は「助命壇」とも呼ばれ、水害の際の避難所でもありました。

十日講

この地には浄土真宗の教えが広く浸透し、江戸時代後期には、「十日講」と呼ばれる念仏のつどいが各地で盛んにとめられていました。文政十二年、尾張徳川家の支藩である高須藩は、門徒の熱意に応じて三千六百坪の土地を寄進し、ここに高須の御坊が桑名御坊の掛所（支院）として創建されました。

二恩寺

高須の御坊には「二恩寺」という寺号があり、本堂入口には「二恩精舎」の扁額が掛けられています③。二恩とは仏恩と世恩のことで、阿弥陀仏と東本願寺（第二十代達如上人④）、そして高須藩（第十代藩主松平義建公⑤）や門徒の先人たちがこの二つの「おかげ」をいただいてここに御坊があるということです。毎年の秋の法要では、達如上人と義達公を偲ぶ「報徳会」がとめられています。建

幕末の再建

創建当初の本堂は、建築後数年で町内火災の類焼により失われます。その後、地域の門徒たちは再建のために精力を傾け、また高須藩からも手厚い支援を受け、十六年後の嘉永七年、現在とほぼ同じ大きな本堂が再建されました。棟梁は名古屋の伊藤平左衛門八世で、明治に東本願寺を再建した伊藤平左衛門九世の父親に当たります。

濃尾地震と大水害

幕末の再建から三十七年後、明治二十四年に起きた濃尾地震によって高須御坊は無常にも倒壊しました。失意に沈む間もなく、門徒たちは再建



5 松平義建公 幕末に活躍した「高須四兄弟」の父（行基寺所蔵）



4 達如上人 高須別院開基

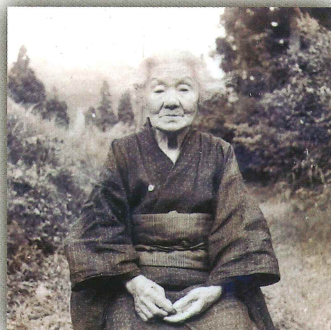


2 境内の石垣

3 二恩精舎 本堂入口に掛かる扁額



有縁講 (赤倉ホテル)



ショウさん

海津生まれの念仏ばあちゃん

幕末の慶応元年、伊藤ショウさんは海津町に生まれました。念仏者だった父親の薫陶を受けて育ったショウさんは、25才のとき、お寺参りができることを条件に東京の平井家へ嫁ぎました。

結婚後も聞法を続けていたショウさんは、昭和19年、82才のときに、娘さんの嫁ぎ先である越後の赤倉ホテル(現 新潟県妙高市)へ疎開しました。親鸞聖人ご流罪の地である越後にはお寺も多く、浄土真宗の教えが深く根づいていました。ショウさんはそれをたいそう喜び、高齢も苦にせずお寺参りに励みました。ショウさんの気さくで飾らない人柄はみんなに親しまれ、大勢の聞法の仲間ができました。

昭和32年、ショウさんは94才で浄土へ還られました。が、三回忌がすんだ昭和34年、ショウさんを偲んで「有縁講」という集いが始められました。会場の赤倉ホテルは、ロビーに大きなお内仏を備えた全国でもめずらしいホテルです。有縁講は毎年11月の約一ヶ月間開催され、すでに60回を超えました。お内仏の前でお勤めをし、法話を聞き、温泉につかり、おいしい料理をいただいて、ゆったり一泊二日を過ごします。

ショウさんがまいた念仏の種子が、遠く越後の地で今も花開いています。

ショウさんの生涯を知るために

【本】「赤倉ホテルのおばあちゃん」(古海法雲著)

【DVD】「赤倉ホテルの念仏ばあちゃん」

※ 高須別院で取り扱っています



6

毛仏さん 高さ約二十センチ

高須別院の沿革

文政 5(1822)年	達如上人から十日講へ御書出される。十日講の活況
文政 12(1829)年	高須藩より寺地の寄進を受け、桑名御坊の掛所として創建
天保 9(1838)年	町内大火により本堂焼失
嘉永 7(1854)年	本堂再建
明治 11(1878)年	桑名別院から独立昇格して高須別院に
明治 24(1891)年	濃尾地震によって本堂倒壊
明治 29(1896)年	高須輪中大水害に見舞われる
大正 8(1919)年	再建工事停滞。婦人法話会の決起。毛仏さん
大正 15(1926)年	本堂落成
平成 28(2016)年	本堂修復

落胆と疲弊

大地震に続いて大水害を被った門徒たちの生活は疲弊し、自分や家族の命を守ることで精一杯でした。

しかし水害から十七年後の大正二年、門徒の人びとは御坊の再興に向けて奮起し、大正八年には起工までこぎ着けたのですが、それから思うように募財がはかどらなくなり、再建事業は停滞し八方塞がりに陥りました。

本堂再建と毛仏さん

それを見かねて立ち上がったのが、明治の終わりに結成された婦人法話会(現在の大谷婦人会)の女性たちです。彼女たちは自分の髪を切って持ち寄り、それを仏像の形にして漆で固めて「毛仏」をこしらえました。毛仏に自らの志と覚悟を託し、御坊の再建に向けて決起したのです。女性たちは阿弥陀仏と御坊の恩徳を説いて回り、浄財集めに東奔西走しました。女性たちの捨て身の活動が実を結び、ついに大正十五年、現在の十五間四面の荘厳な本堂が落成しました。震災で倒壊してから三十五年の後でした。棟梁は内田仙司(揖斐川町)で、伊藤平左衛門九世の弟子です。毎年春の法要では「毛仏法要」が営まれ、当時の輪番が記した「毛仏縁起」が拝読され、毛仏さんが公開されます。

に向けて力を尽くしますが、五年後の明治二十九年、追い打ちをかけるように未曾有の大洪水が高須輪中を襲いました。再建のために準備されていた資材はことごとく流失し、再建事業は振り出しに戻ってしまいました。